

うなぎの蒲焼

間の宿「柏原」

昭和五十六年二月五日号

東海道をかごや馬に乗った人々が行き交っていた江戸時代、東海道五十三次の吉原宿と原宿の間に間の宿「柏原」がありました。

柏原宿のあった場所は国鉄東田子の浦駅の西側あたりで、ここには九軒の茶屋（今でいう食堂）があり、浮島沼でとれたうなぎやなまずの蒲焼を名物に繁盛していました。この九軒の茶屋のうち、大正の頃まで営業していたのは酒惣まぶさうという茶屋一軒でした。

今回は、この酒惣が母親の生家という市史編さん室の鈴木富男先生に間の宿「柏原」について、いろいろ教えていただきました。



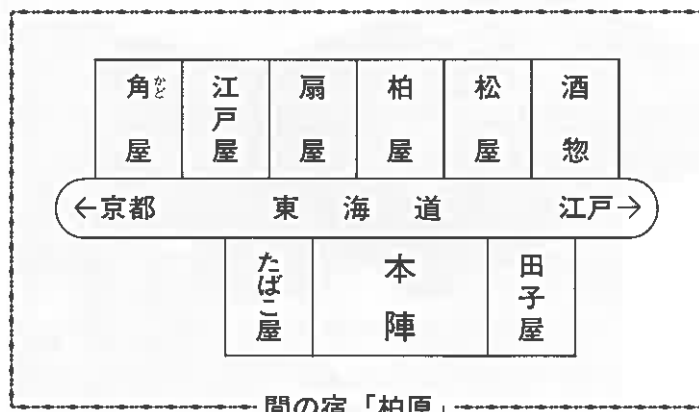
うなぎの蒲焼のいいにおいも、金のない俺たちにはうなぎの旅。と弥次さん、喜多さんが、がまんして通った柏原の間の宿でした。

間の宿「柏原」はどうして

設けられていたのですか？

吉原宿と原宿の間に二里六町、約十四キロメートルもあつたので、この中間にあたる柏原に休けい所として間の宿ができたらしい。元禄二年（二六九〇年）に出版された東海分間絵図に「かしわ原、茶屋がずかず、ここにうなぎ売りあり」と書かれていることから柏原のうなぎの蒲焼きは元禄以前から名物として旅人の味覚を楽ませていたことが分ります。また、間の宿柏原の成立も江戸時代の初期にさかのぼることができます。

このほか、十返舎一九の東海道中膝栗毛の中にも、「ここはうなぎの名物にて、家ごとにあおぎたてる蒲焼きのにおいに、一人は鼻をひく



ひくさせ、うなぎと難儀なげまをかけた「蒲焼のにおいを嗅ぐも、うとましや、こちら二人は、うなぎの旅」と言つて、がまんして素通りしたことが書かれています。

なぜ茶屋がなくなったのですか？

明治四年に宿場制度が廃止され、この柏原宿もなくなつたのが大きな原因。でも明治になつても細々やつていたらしいが、明治二十一年、鉄道が通ると客足がぱったり減り、大正の頃までやつていたのは酒惣だけだつた。酒惣のおばあさんのところへ行くと、うなぎの蒲焼をごちそうしてくれながら、「幕末のころは『遅い！』と峰打ちかみうち『早く持つてこい！』と柱に斬りつける武士がいて、こわかつたよ」と話してくれました。



「釣りをやりたいが、郷土史の仕事が忙しくて」と語る鈴木先生。

とても七十八歳とは思えないほど若々しい。郷土史の研究は旧須津村の助役時代から出版した本も二十冊近くになる。富士市の歴史関係なら、この先生の右に出る者はない。